ARCHITECT

NO.301

2013. 10. OCT.

CONTENTS

自作自演174 ……大橋康孝・上西真哉・林　美博・西川光広 …… 2

最終回　インドの都市から考える

街と融け合う寺院 ……柳沢　究 …… 4

第２回　自然・人間・建築と環境

感覚・行動と時間デザイン ……宿谷昌則 …… 6

JIA静岡発　第1回建築ウォッチング 静岡ガス本社ビル見学とワインの夕べ…鈴木俊史 …… 8

JIA 岐阜発　建築塾2013　宇野享氏「思考の継続と深度」……村山恒久 …… 9

JIA三重発　第2回 会員研修会 伊賀・島ヶ原で「コミュニティデザイン」をテーマに研修　中西修一 ……10

Bulletin Board ……11

第1回 JIA東海住宅建築賞2013 結果発表 ……12

＜講評＞……横河　健・伊藤恭行・藤原徹平 ……14

「あいちトリエンナーレ2013」建築関係の作品も多彩 …… 牧ヒデアキ ……16

JIA愛知「建築家フェスティバル」10月に開催！ …… 久保田英之 ……17

JIAと私① ブリテン委員会の体制確立、これからもJIA活動に邁進 …森口雅文 ……18

保存情報　第143回　オリエンタルビル屋上観覧車 ……藤田淑子 ……19

カトリック主税町（ちからまち）教会 ……森口雅文 ……19

理事会レポート ……小田義彦 ……20

東海支部役員会報告 ……見寺昭彦 ……21

JIA東海支部役員選挙・愛知地域会役員選挙の告示 ……22

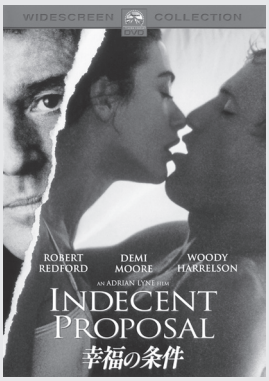
東海とっておきガイド㊾　愛知編 …… 中渡瀬拡司 ……23

地域会だより ……23

編集後記 ……市川　司・酒井直子 ……24

映画の中の建築 ⑦

ソーク研究所



若い優秀な建築家と美しい妻が、出世作を見込み、借金をして土地を買い自宅を建てるが、不況になり職場をリストラされ経済的窮地に陥る。それをラスベガスのカジノで一気に挽回しようとするが、すべてを失ってしまう。そのときハンサムな億万長者（ロバート・レッドフォードだからできる!）が現れ、奥さんを一晩貸してくれたら100万ドル支払うと申し入れる。愛か？金か？二人は迷うが、結局はその誘惑に―。

案の定、その後二人の間には亀裂が入り、建築家は大学に戻る。学生を前にライト、コル、ゲーリーなどのスライドショーをして、大写しされたソーク研究所を前に「ちっぽけなレンガにも夢がある。何かに生まれ変わるのを望んでいる。それが建築家の魂だ」とカーンの言葉をのたまう。つまり金持ちや権力に建築家が拮抗できるのは、唯一自分の作品をつくる以外に道はないことを彼は悟ったわけだ。臆面もなくこういう建築のシーンが描けるのはアメリカ社会の中に建築が浸透している証拠かと思い、嬉しくなった。

しかし、映画「幸福の条件」（1993年、監督エイドリアン・ライン）そのものはナンセンスな設問に縛られ、B級映画に終わった。ちなみにその年の「最低作品賞」「最低助演男優賞」「最低脚本賞」を受賞したらしい。

光崎敏正｜愛知地域会

大橋　康孝（JIA静岡）

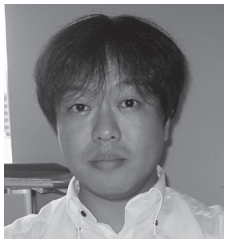
高橋茂弥建築設計事務所（静岡市葵区西千代田町29-30　TEL 054-246-2731　FAX054-247-0113）

一輪車

現在、私の娘たちが一輪車に夢中になっています。一輪車の競技人口は、全国で1万人程度のマイナースポーツであるため、あまり知られていませんが、外部で行うトラック競技（100m、400m、片足走行、タイヤ乗り、リレーなど）と室内で行う音楽に合わせて演技をするフィギュア部門があります。フィギュア部門は、フィギュアスケートを想像していただくとイメージしやすいです。

静岡県は全国的にも一輪車が盛んな地域で、多くのクラブチームがあります。娘たちが通うクラブチームには、3歳から大学生まで参加していて、お姉さんたちが下の子どもたちの面倒を見ることによって、一輪車の技術だけではなく、目上の人に対する挨拶の仕方や、お互いを思いやる心など多くのことを教えてくれます。

そんなクラブの彼女たちに共通して言えることは、皆一輪車に夢中ということです。とにかく一輪車が楽しくてしょうがないようで、黙々と練習を行っています。一輪車に乗ることすらできない私にとって、信じられないようなスゴ技をいとも簡単にやってしまう彼女たちですが、ひとつの技を習得するために繰り返し繰り返しひたすら練習することによって、自分のものにしているのです。そんな彼女たちの姿を見ながら、純粋に、何かに打ち込む大切さを改めて感じ、ひたむきに建築と向き合っていこうと思う今日この頃です。



上西　真哉（JIA愛知）

伊藤建築設計事務所（名古屋市中区丸の内1-15-15桜通ビル　TEL 052-222-8611　FAX 052-222-1971）

My Roots：伊勢市駅前のにぎわい

このたび、JIAに入会させていただきました上西と申します。この場をお借りしましてご挨拶させていただきます。

私の出身地、三重県伊勢市は20年に一度の式年遷宮で活気づいています。ご存じのように伊勢のまちづくりは遷宮とともに進められており、前回（第61回）の式年遷宮では内宮前のおはらい町、おかげ横丁が整備され、以降、大変なにぎわいとなっています。対照的に外宮前のJR伊勢市駅前は二つの商業施設が撤退し、しばらくは空地となっていました。私の建築のルーツは、この空白となった駅前にあります。

ちょうど20年前、私は大学に入学し、建築を本格的に学び始めました。また親元を離れ、一人暮らしを始めた年でもあります。伊勢に帰り、それまで生活の中心として存在していた駅前から建物が消え、にぎわいが去っていく様子は、心のさみしさを増幅するようであり、またまちにおける建物の機能や存在意義を考えるきっかけとなりました。

今回の遷宮で、空地であった場所にもホテルが建設され、通りには地元飲食店がオープンしました。近年のパワースポットブーム、B級グルメブームも手伝って、駅前にもにぎわいが戻りつつあります。お伊勢参りは、外宮の豊受大御神に参拝してから内宮の天照大御神を参拝するというのが慣わしです。にぎわいを一時のブームで終わらせないためにも、外宮へと続く駅前通りには、お伊勢参りのはじまりにふさわしい、物語性をもったまちづくりが必要ではないでしょうか。

私のルーツであるかつての空地を眺めながら、改めて魅力ある建物・まちづくりについて考えていこうと思います。

林　美博（JIA愛知）

三橋設計名古屋事務所（名古屋市中区丸の内2-15-21　TEL 052-211-5573　FAX 052-204-0969）

家庭菜園

今の私の“自作自演”は、家庭菜園です。犬山市羽黒地区は住宅と畑が混在しており、ご近所の先輩諸氏は畑を借りて野菜づくりに精を出しています。田んぼを借りて米づくりをしている猛者もいます。私はその域には届きませんが、さまざまな野菜づくりを楽しんでいます。無農薬を心がけていますが、キャベツ、ブロッコリーなど葉物に付く虫の食欲は旺盛で、少しでもチェックを怠ると葉脈だけのレース（編み物）状態です。店に並ぶきれいな野菜は、相当量の農薬を使用しているに違いありません。今は週末しか手入れができず、キャベツやブロッコリーは断念中です。

最近やっと土づくりが大事なことを実感し、隣の栗畑から飛んでくる落葉、米糠、雑草や生ごみを材料に堆肥づくりにも挑戦しています。玄米をコイン精米機で精米したときに手に入れた米糠も堆肥の大切な材料です。なお、今年はこの糠を使って自家製の糠味噌をつくりました。自分で育てたキュウリの糠漬けは格別です。

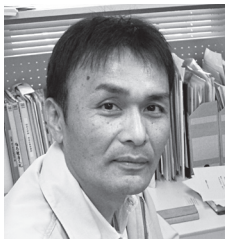
毎年新しい野菜にも挑戦しています。今年は落花生に挑戦していますが、師匠から養分過多で地上部分が育ちすぎると結実が少ないと指摘され心配です。最近収穫したのが、栽培が簡単で加工・貯蔵しやすい生姜です。これからは、キュウリやトマト、トウモロコシなどの夏野菜の後始末をして、大根、ハクサイなど秋冬野菜の準備を始めます。

取りごろのキュウリ

色づく前のトマト

収穫した生姜

地上部が育ちすぎと言われた落花生



西川　光広（JIA岐阜）

シーテック21（岐阜市藪田南1-4-16　井上ビル2F　TEL 058-278-0330　FAX 058-275-1256）

大好きな街、代官山

私自身、この世界に飛び込むきっかけとなった、建築家槇文彦氏による代官山の顔、複合施設「ヒルサイドテラス」。誕生から半世紀近く経ても新鮮さは健在です。

1980年代、学生時代を横浜で過ごし、東横線沿いに住んでいた私にとって、「代官山」はあこがれの街であり、背伸びをしながら通った思い出の街。貧乏学生の私は、バイト代が入ると建築雑誌やファッション雑誌でしか見たことがなかった槇先生の作品を見学に行ったりし、やがて、先生の作品が溶け込んだこの街が居心地良くさえ感じられるようになりました。

旧山手通り沿いに面したオーオプンカフェ、“カフェ・ミケランジェロ”でお茶を飲みながら談笑したり、本を読んだり。そんな心地良いひとときを過ごさせてくれる街、それが私にとっての「代官山」でした。卒業後は年1回ほどしか訪れることができませんが、そんなときも昔同様優しく迎え入れてくれる街。

“同潤会”の跡地再開発以降は街が二分された印象がぬぐえないでいましたが、最近、代官山「蔦屋書店」の出店により、また新たな展開が生まれたような気がします。今後も大好きな街「代官山」がどう変わっていくのか、楽しみに通い続けたいと思っています。

代官山 蔦谷書店

インドの都市から考える 第❻回

街と融け合う寺院

柳沢　究
名城大学理工学部建築学科 准教授

やなぎさわ・きわむ｜1975年横浜市生まれ。2001年京都大学大学院修了。2003年神戸芸術工科大学助手。2008年一級建築士事務所究建築研究室設立。2012年より現職。博士（工学）作品:「斜庭の町家」「紫野の町家改修」「SAKAN Shell Structure」ほか。 著書:『京都げのむ』「生きている文化遺産と観光」「無有」ほか。 受賞:地域住宅計画賞、京都デザイン賞入選、雪のデザイン賞奨励賞、タキロン国際デザインコンペ２等ほか。

写真１：街角にあるヒンドゥー寺院。シカラと呼ばれる尖った屋根形状が特徴的

写真２：住宅の中にあるリンガ。もともと寺院だった場所が住宅に変化した

20世紀末に始まるインド全体の経済成長にともない、近年ヴァーラーナシーでも大規模な宅地開発やショッピングモールの建設などが目立つようになった。都市空間の更新はその速度と激しさを増している。連載最終回となる今回は、聖地としてのヴァーラーナシーを支えるガートとならぶもう一方の立役者、ヒンドゥー教の寺院・祠に焦点をあてながら、筆者が現在関心を寄せている都市空間の現代的変化について触れてみたい。

▣林立するヒンドゥー寺院

ヴァーラーナシーの旧市街には、さまざまな神話や伝説に彩られた歴史のある寺院・祠がおびただしく存在する(**写真１**)。筆者が2000年に旧市街の中心部だけを対象に行った調査でも、その数は(小規模な祠も含め) 700にのぼった。分布密度は平均すると29m四方に一つとなるが、多くは街路沿いに位置するため、旧市街を歩いていると10mと空けずに寺院の塔状屋根(シカラ)に出会う。実感として「林立」という表現がふさわしい。とりわけ街の中心寺院であるヴィシュワナータ寺院(通称:黄金寺院)や火葬ガートといった重要スポットの周囲、火葬ガートへ至る葬列のルート沿いには、すさまじい密度で寺院が集まっている。ヴァーラーナシー自体がインド有数の聖地であるが、その中でも特に「聖なる」場所に寺院が集まり、寺院の密集がさらなる新寺院を引き寄せる、という連鎖反応が起きているようである。しかもシカラをもった建物だけが寺院ではなく、住居の中の一室や街路の地下など、旧市街のいたるところに寺院が隠れている。路傍の粗末な祠や家庭のリビングに鎮座するリンガ(**写真２**:シヴァ神を象徴する神体)が、実は数百年の歴史を持ち、巡礼地になっている重要な神様であったりする。

都市空間との関係という視点からこれらのヒンドゥー寺院を見ると、二つの重要な特徴が見て取れる。一つは寺院と場所との強い結びつきである。寺院の聖性にとって本質的なのは場所であり、それを示すのが屹立するリンガである。したがって寺院は原則的に移動せず、建築物は場所やリンガに比べればあまり重要ではない(と考えられている)。もう一つは、それゆえ建築的に独立した形状をもたない寺院や祠が多いことだ。道端や住居・店舗の一室にリンガや神像が置いてある事例は数え切れない。なかでも興味深いのは、もともとは独立して建っていた寺院が、周囲の増築の結果、他の建築物に囲い込まれてしまうという事例がしばしば見られることだ。筆者はこのような寺院を「融合寺院」と名付けて注目している。

▣増築で囲い込まれた「融合寺院」

「融合」の様子は多様である。隣接する建物にめり込んでいたり、シカラの上を

写真３：「水平型」融合寺院：外壁も塗り分けられている

写真４：「垂直型」融合寺院：屋根の上を居室がまたぐ

写真5：「包含型」融合寺院：屋根以外は包まれてしまっている

建物が覆っていたり、四方上方を囲い込まれた寺院のシカラだけが屋上から突き抜けてたりといった事例が見られる(写真３～５)。内部にはリンガが据えられ、寺院機能はちゃんと維持されているものが多い。現地ではありふれた現象のため等閑視されているものの、極めて興味深い現象である。

聖地ゆえの寺院の多さと人口圧力による土地不足がその背景にあるのは明らかであるが、不思議なのは寺院を壊さずにわざわざ新しい建物に組み込む点である。ヒンドゥー教では寺院の破壊や用途変更は原則として禁じられているという。あるいはすでにある寺院を壊すことをためらう素朴な宗教心に基づくのかもしれない。いずれにしても注目すべきは、融合寺院が既存寺院をいわば地形と同等の前提条件として受け容れ、その上に新たな建設を重ねるというシンプルかつ強力な手法で、新旧の都市空間の融合を実現している点である。

ある土地に古くからある寺院があり、そこに何らかの開発の要求が生じた場合、普通は寺院を壊して開発を実現するか、あるいは寺院を残し開発を諦めるかの二者択一を迫られる。しかしここで融合寺院は、(まがりなりにも)寺院の機能と形態を残しつつ新たな建築物を覆い被せるというアクロバティックな方法で、その対立を超えている。「融合」の具合は乱暴で暴挙と紙一重である。苦肉の策というのが実際かもしれない。しかし結果として立ち現れたその姿は、三千年にわたって聖地でありかつ生活の場であり続けたヴァーラーナシーという都市の歴史性と特質を如実に表現するものとなった。また同時に都市空間更新におけるストックの維持と活用という問題に対して、一つの明快な答えを提示している。この現象を〈場所の記憶を物理的に継承しつつ都市空間を更新するシステム〉として評価できないだろうか、というのが筆者の目下の関心事である。

回重層性を備えた都市空間に向けて

近年日本でも、景観法(2005)や歴史まちづくり法(2008)の制定が示すように、歴史性のある景観を都市の重要な価値と見なす考え方が定着してきた。しかしながら、京都や奈良といった豊富な歴史的文脈を有する都市はむしろ稀であり、郊外やニュータウン、戦災により歴史的市街を失った都市など、そもそも依拠すべき歴史性が薄い都市が多いのが我が国の現実である。そのような都市において、いかにして将来にわたって歴史性を担保した都市空間および景観形成が可能だろうか。

人間は時間的な生物であり、空間において時間的痕跡が読み取れることが居住環境の豊かさに繋がる、という環境デザインにおける歴史性の本質的意義を論じたのはケヴィン・リンチ(「時間の中の都市」1974)であった。その指摘が示すように、都市における歴史性とは、その地における経時的な人の営みが、過去だけでなく未来にわたって、空間的に蓄積され表現されることで形成されるものである。そのように考えれば、都市の歴史性の育成のためには、過去に連なる「歴史的建築」の維持や発掘だけではなく、現在普通にある「歴史的ではない」要素をも都市の歴史的営みの一部として捉えるという視点が欠かせない。そして次代の更新にあたって、それらを都市の記憶＝時間的痕跡として物理的に継承・蓄積していくための具体的な方法論が求められる。これは既存ストック活用という、もう一つの現代的テーマへの応答ともなるはずである。

筆者がインドの「融合寺院」に注目するのは、このような問題について考える上での格好のケーススタディになると考えるからである。もちろん日本とインドでは歴史・文化的背景はもとより木造と組積造という構法の差も大きく、「融合寺院」を単純に手法論として日本に適用することはできない。しかし蓄積の上に蓄積を重ねる「ビルト＆ビルド」とでも言うべきその手法は、スクラップ＆ビルドあるいは歴史的意匠の再生・模倣といった、都市を時間的にも空間的にも分断する手法では実現し得ない、時間的な連続性と重層性を備えた都市空間を創出するのための、一つのヒントとなると考えている。　(了)

〈隔月６回連載〉

自然・人間・建築と環境

第２回

感覚・行動と時間デザイン

宿谷昌則 | 東京都市大学環境学部環境創生学科 教授

“環境”なるキーワードが建築設計の主題として取り上げられ始めて20年以上が経過しただろうか。“自然環境との共生”“環境にやさしい”“地球にやさしい”といった謳い文句を設計主旨の中に見るのが当たり前になった。

設計者の多くが“環境”“自然共生”といった事柄を考えるようになった証しだと思えて嬉しくなることがある一方で、少なくはない事例が空虚なスローガンをただ単に並べているだけであるのを知って、「道は遠し」と悲しくなることもある。空虚なスローガンが実質を伴う建築へと変容していくには、まだまだ長い時間が必要だろう。1950年代から今日までの60年にわたって形成されてきた私たち日本人の人間観・社会観、ひいては建築観は、良くも悪くもそれほど急に変われるほど軽くはないからだ。

筆者がここで改めて述べるまでもなく、建築には芸術的・文学的という側面と技術的・科学的という側面があって、それらの総合として建築は成り立っている。そこに建築の面白さがあるだろう。私たち専門家の頭（脳）の使い方は、芸術・文学・技術・科学といった側面の違いによって異なるだろう。その逆にこれら側面の違いにはよらず、対象が建築であるがゆえの共通した頭（脳）の使い方もあるかもしれない。建築の見方や考え方にある特徴は何だろうか。

何かの手掛りがつかめるかもしれないと思って、建築作品の審査会に呼ばれるたびに、応募作品の外観や内観写真に人が写っているか否かを数えたことがある。その結果はいつも概ね同じで、人の写っている写真10～20％、人の全く写っていない写真80～90％である。これは何を意味しているだろうか。

建築はどんな用途にせよ、その住まい手・使い手のためにある。設計者はみな、訊ねられれば、“もちろん住まい手・使い手のことを考えて設計している”と答えるだろう。しかし、建築のつくり手が、建築のいわゆる見栄えに気をとられ過ぎて、住まい手の存在を軽んじてしまっている…ということはないだろうか。80％を超える応募作品に人の写っていない写真が用いられているという事実は、その可能性が否定できないことを示していると思う。

❍

以上のように写真のことを考えているうちに改めて気づいたのは、すべての写真が瞬時における空間を写し撮っていて、時間が止まっているという当たり前の事実である。これは、時間の流れがあってはじめて知覚・認知し得る建築の側面を、建築にかかわる人々、特に建築家と呼ばれる人々に知らずしらずのうちに軽んじさせる傾向を産みだしてはいないか。

空間の知覚は主として視覚に基づいており、それを補う感覚として聴覚・触覚・嗅覚がある。これに対して時間の知覚は主として聴覚に基づく。写真撮影に対して録音を考えてみよう。写真は3次元空間を2次元空間に圧縮して記録している。その際に「時間」性は捨てられる。録音は時間の流れの中に現われる音という現象を、例えばDVDなどの媒体上に磁気パターンとして記録することだ。その際に「空間」性は捨てられる。

以上のような視覚的側面たる「空間」は〈構造〉と言ってもよい。〈構造〉とは〈機能〉に対置されるべき目に見えるカタチ、〈機

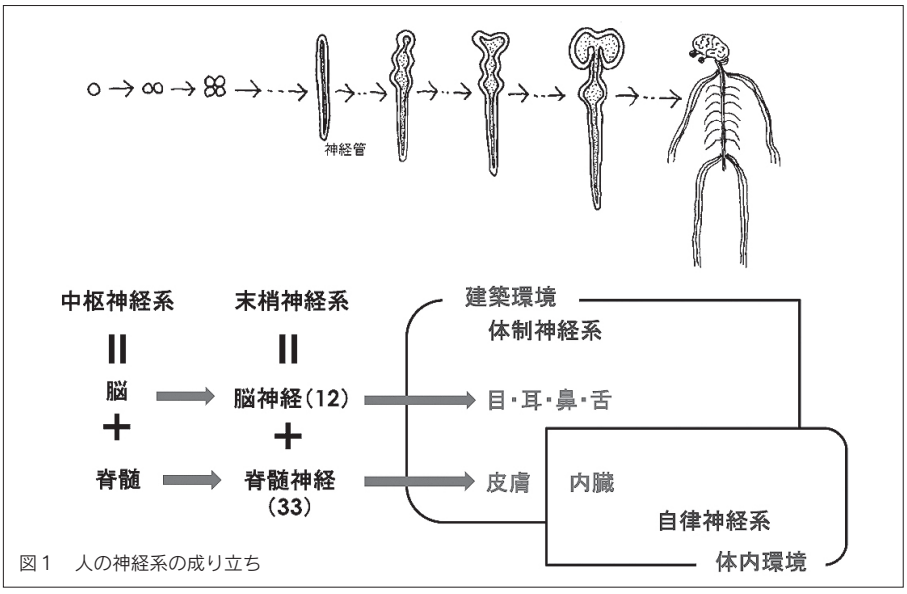


図１　人の神経系の成り立ち

能〉は振る舞いカタを指す。〈構造〉・カタチは写真にとれるが、〈機能〉・カタは写真にとれない。後者は時間の流れの中に現われるからだ。カタチは空間的・視覚的、カタは時間的・聴覚的である。

〈構造〉と〈機能〉の関係は、大気・水と循環、心臓・血液と循環、脳と心、文字と音声、音符と楽音、幾何と代数、分数と循環小数、光の粒子性と波動性など、さまざまな学問や芸術の領域に見出すことができる。このように考えを巡らしてくると、建築の世界では、私たちの意識が〈機能〉・カタに比べて〈構造〉・カタチに偏してきたと言えよう。先に述べた写真の話はその状況証拠である。

「空間」を気にし過ぎるばかりに「時間」を軽んじてしまう。建築にかかわる環境問題の主たる要因はここにあるのだと思う。時間と空間の双方を等しく取り上げ考える。これからの時代に在るべき建築観はその上に築かれていくのではないだろうか。

人は身近な環境空間における光や熱・空気・湿気の振る舞いに応じた「感覚」を入力として、末梢と中枢から成る神経系を働かせて、温かい―寒い、涼しい―暑い、明るい―暗いなどを知覚・認識する。その結果、必要に応じて環境を改変するために、服を脱いだり着たり、窓を開けたり閉めたり、照明・暖冷房機器のスイッチを入れたり切ったりする。入力が「感覚」、出力が「行動」だ。以上の全体を「感覚―行動プロセス」と呼ぶが、これはまさに時間の流れの中に現われるカタにほかならない。

温かさや涼しさ・明るさの知覚・認識がどのようにして発現するのか。人の感覚や知覚・意識のすべては神経系の働きなのだから、人間生物学（人の解剖学や生理学）的な視点に立って、人と建築環境との関係を眺め直す必要があるだろう。

❍

そこで、人の神経系の全体像（図1）を概観しつつ話を先に進めることにしよう。人は誰でも一個の受精卵細胞から始まって約60兆個の細胞からなる多細胞生物へと成長していく。神経系を構成する細胞群はまず、神経管とよばれる管状の構造を形成し、その後、その上部が膨らんでいき、そこが脳になり、残りが脊髄になる。脳と脊髄をまとめて「中枢神経系」といい、脳からは左右12対、脊髄からは左右33対の神経線維が体内に張り出す。

神経線維の多くは体表に向かって張り出すが、一部は内臓にも張り出す。頭部を含めて体表に向かう一群の神経繊維を「体性神経系」、内臓に張り出す一群を「自律神経系」という。両者をまとめて「末梢神経系」と呼ぶ。体性神経系は「建築環境」につながり、自律神経系は内臓という「体内環境」につながっていると捉えることができる。

感覚に始まり行動に至って身近な環境に変化が起きれば、それが新たな刺激になって改めて感覚が現われるので、感覚―行動プロセスは、図2に示すように、サイクルとして繰り返される。このサイクルの中心を通って、読者の目の方向に進む時間軸を取れば、サイクルは読者の方に向かって螺旋を描くことになる。螺旋の進行とともに創出される環境の質は、パッシブデザイン技術があるかないかで著しく異なってくる。

パッシブデザイン技術が十分に施された建築では、遍在する身近な自然を生かすことができ、その結果として、然るべき「快」が創出される。一方、パッシブデザイン技術が不在の、あるいは不十分な建築では、偏在する身遠な自然の収奪・浪費によって「快」は現われるとしても、むしろ大きな「不快」を生じることを必然としてしまう。ここで言う「不快」とは、化石燃料の過度の使用や核燃料の使用による健康減退・環境汚染を指す。化石燃料ばかりか核燃料さえ使用することの結末が「不快」の極みを生じることは、2011年3月11日以来今なお進行中の原発人災が明らかにしつつあるとおりだ。

適切なパッシブデザイン技術には、身近な自然の有り難さに気づける心や、ひいては他者を思いやれる心を、建築のつくり手・住まい手の双方に生じさせる力が潜在していると思う。人の在るべき感覚・行動を引き出す「時間デザイン」は、空間デザインとともに重要だと思う所以である。

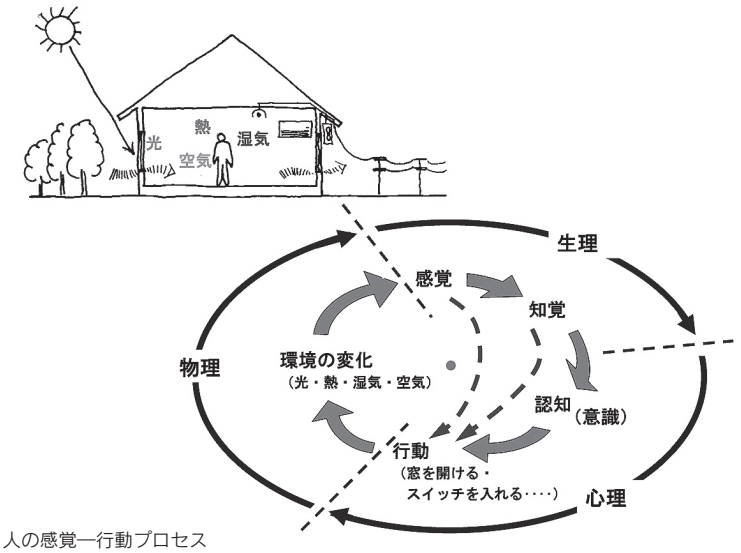


図2　人の感覚―行動プロセス

しゅくや・まさのり｜自然のポテンシャルを生かした光環境や熱環境づくりについて、熱力学・人間生物学の視点に立った研究と教育に携わっている。専門は建築環境学。著書に『Exergy: theory and applications in the built environment』（2013年1月、Springer-Verlag London）、『エクセルギーと環境の理論』（改訂版2010年9月、井上書院）など。

◉次回は12月号掲載です。

JIA 静岡発　第１回建築ウォッチング

静岡ガス本社ビル見学とワインの夕べ

エプロン姿で料理

美味しいものを食べると幸せな気持ちになりますよね。JIAの研修で料理教室があっても良いのかなって思っていました。静岡地域会の事務局へ行く途中、駅ビルの１階にあるABCクッキングスクールの前を通ります。若い女性たちが一生懸命料理していて、いいな、楽しそうだなって、いつも思っていました。

本年度のJIA静岡第１回建築ウォッチングは、2013年8月8日（木）に行われました。今年3月に竣工したばかりの静岡ガス本社ビルの見学と併設ショールーム「エネリア」内のCOOKING STUDIOでのお料理教室です。静岡ガスの本社ビルは、静岡駅南口から歩いて10分ほどです。SRC造で地上6階建て制震構造、延べ床面積7,516.97㎡。設計監理は日建設計、施工は清水建設株式会社。1階はショールームと本社エントランス、2階は関係会社オフィス、3階・4階は本社オフィス、5階は会議室・役員室、6階が機械設備置場です。エネルギーを供給する企業として、省エネルギーの推進を地域に伝える使命があり、その役割の一つとして、この本社ビルを建て替えたそうです。

見学の前に5階の会議室で、建物の概要と各種設備システム等についての説明を受けました。6階（屋上）には機械がびっしり配置され、その上部に太陽光発電・温水集熱パネルが載っています。外側からは見えませんが、機械が多くの配管で繋がっている光景は、まさに工場です。ここには、都市ガス（天然ガス）を利用したガスコージェネレーションシステム、排熱を給湯・空調に利用し、それに太陽熱で温められたお湯も同時に利用するジェネリンク、空調の調湿を行っているデシカント空調機などが配置されています。機械的に省エネシステムを考える場合は、こんなにもたくさんの機械と配管が必要になるのです。階段室上部には、自然開閉式屋上換気窓が設けられており、これはもう一つのエコ設備として、良いなと思いました。オフィスフロアには、４面採光の庇のあるバルコニーがあり、西側の木製ルーバー（静岡県産材）とともに採光・遮光をうまく制御しています。外観はRC打放しで水平ラインが強調されたファサードですが、横に並んだ垂直の木製ルーバーが優しさを演出しています。

１階のショールームに移動して、リフォームのBefore & Afterの体感展示や、床にも映像が投影される3Dシアターを体験しました。3Dで設計図をつくれば、実際にその中で動き回ることができるバーチャル体験です。これからのプレゼンには必要になりそうです。でも、模型やスケッチで表現して後は想像力を…の方が僕は好きです。

さあ、お待ちかねの「ワインの夕べ」（料理教室）です。本日のメニューは、「ハーブチキン・じゃがいものガレット・夏野菜の彩りマリネ」。講師の坂本なおみ先生（酒菜さかもと）のご指導で調理スタート。普段は台所に立たない男性陣は、コンロの使い方、野菜の切り方、いため方などを坂本先生とCOOKING STUDIOのスタッフに助けてもらっています。「ハーブチキン」の手羽元は、皮と反対側を骨に沿って包丁を入れて開き、筋を切る。こうすると食べやすいのだそうです。塩・胡椒で下味を付けて、ローズマリーを細かく刻む。粒マスタード・オリーブ油に20分浸けこんでから、230度のガスオーブンで20分焼いて完成。「夏野菜の彩りマリネ」、ズッキーニはピーラーで皮を数カ所剥いてから幅１㎝の輪切りにする。ナスもピーラーで皮を数カ所剥いて一口大に切る。ピーラーで剥くと見た目も良く、食べやすいそうです。オリーブ油で焼いてマリネ液に20分ほど浸けこんで完成です。みんなお揃いのエプロン姿で真剣ににやりました。

１時間ほどで料理が完成し、手際よく上手にできましたと坂本先生に褒めていただきました。見た目良く盛りつけてからワインで乾杯です。とても美味しかった。大勢でわいわい作って一緒に食べて、楽しい時間を過ごすことができました。小学校の家庭科が思い出されます。ぜひまたやりたいですね。もちろん食器の洗い流しと後片付けは、しっかりやりました。

静岡ガス本社ビルの見学（左右とも）

鈴木俊史｜俊建築設計事務所

JIA 岐阜発　建築塾 2013

宇野享氏「思考の継続と深度」

熱心に話を聞く参加者

7月13日（土）、岐阜市立岐阜女子短期大学において、「JIA岐阜 建築塾2013」が日本建築学会岐阜支所の共催を得て開催されました。講師は大垣市出身の建築家宇野享氏です。「思考の継続と深度」と題した講演には、連日暑さが続く昼間にもかかわらず、会員、法人協力会員、学生、一般の方など多くの出席がありました。

まず画面に映し出されたのは、芸術写真のような何とも美しいものでした。4,000倍のかたつむりの舌、卵の殻（500倍）、バラの花びら（2,000倍）、鮫の肌（200倍）…。一見建築とは無縁のようだが、建築のファサードをイメージさせるに充分なものであると、宇野氏は講演の重要な要素を語られました。確かに私たちは、美しいもの、美しい建築に憧れてこの道を目指したことを思い起こしました。

以下、作品についてのお話です。

〈太田のテラスハウス〉 直前の結果しか影響されないというマルコフ過程の理論を応用したY型アパート。方向性がないY型の住戸を連続させたもので、異なった大きさの室内にも対応できる。

〈空の記憶〉 芸術のワークショップや創作活動を行う彫刻家の活動拠点として岐阜県白川町に建てられた別荘。“おむすび型”のユニットがネックレス状に連結するワンルームが中庭を囲む。ひとつひとつの大きさを自由に扱えるつくり方になっており、結束点が狭まっているため次の空間も見えづらく、連結されていても個室感がある。広大な敷地全体をひとつの場として感じられることを期待した。

〈NOTCHED WALL HOUSE〉 周辺環境と敷地が持つ秩序（方向性）と回転グリッドに則した内部空間の秩序は、この建築と大地の持つ磁場にズレを生じさせる。回転グリッドを採用することで生じたギザギザの外壁の強さと、即物的に置かれた白のコンテナが、大地から切り離された建築の抽象性を強調する。

〈幕張インターナショナルスクール〉 千葉県千葉市にある私立幼稚園・小学校。多国籍の児童を対象としながらも、学校教育法第1条に則した、いわゆる1条学校である。授業は国語の時間を除いて英語で行うイマージョン教育校である。

〈ぐんま国際アカデミー〉 教育特区として認定された群馬県太田市の市街地に建つ、「英語イマージョン教育」を行う小中高一貫校の小中校校舎。戸建て住宅地に溶け込む木造平屋の巨大な平面の建築とした。英語と日本語環境の分離の問題や、1クラス36人の生徒に対してネイティブとバイリンガルのふたりの教員がつく少人数教育など、通常の教室を並べただけではうまく機能しない教育の風景を、プログラムレベルからとらえ直して設計。約100人の1学年単位をハウス、3学年ごとの単位をネイバーフッドとしてグルーピングした「大きな家」である。

作品紹介の後、話題は地元（岐阜）の建築家や設計事務所とのネットワーク形成、コンペへの挑戦などに移りました。岐阜市発注の「市立図書館新築工事」のコンペには、地元の設計事務所、大建メットと組んで1次審査を突破したこと。広島県の「特別養護老人ホーム」コンペでは見事勝ち抜き、実施設計を終えたこと。これらの経験を元にいろいろな人や設計事務所と組んでいくネットワークチャレンジをますます発展させていきたい、チャレンジは大変だが全く違った建築が生まれる可能性があり、前向きに取り組んでいきたい、とのことでした。

岐阜市では毎年、「創造」をテーマにした“ギフレク”という催しがあり、いろいろな人が好きなことにチャレンジしています。宇野さんは学生を集めて1日で200個の建築模型をつくることに挑戦。学生1人で何個できるかという無茶な企画だけれど、市民の目の前で建築をつくるという体験をさせたいという話には、聴衆から大きな賛同の反応がありました。

次の年に行ったのは、ダンボール美術館。子どもたちがダンボールを折り曲げ、形に切って、絵を描いて、ひたすら張り合わせるというもの。自分の手がけたものが形になっていくという経験をさせることは、とても大切なこと…私は心から賛同の拍手を送りました。

講演終了後は、近くの喫茶店で懇親会を行いました。お酒の出ない、ケーキとコーヒーの会はとても新鮮で、参加した学生からはいくつもの質問が出ました。こうして「JIA岐阜 建築塾2013」は終了しました。

左｜「空の記憶」（「新建築」の HP より）
右｜左が宇野享氏、右は長尾英樹岐阜地域会会長

村山恒久｜
村山建築設計事務所

JIA 三重発　第２回 会員研修会

伊賀・島ヶ原で「コミュニティデザイン」をテーマに研修

写真３　木製テントを見る

7月12日（金）に開催された三重地域会の第2回会員研修会（森羅万象匠塾）の報告をさせていただきます。今回は、伊賀市島ヶ原にある穂積製材所にお邪魔しての研修です。テーマは「コミュニティデザイン －穂積製材所プロジェクト（ホヅプロ）の取組み－」です。

皆さんは、コミュニティデザインという言葉をご存じでしょうか？　聞いたことがありそうな言葉ですが、まだできて数年しか経っていない新しい造語で、studio-Lの代表山崎亮氏が彼の仕事を表現するために考え出したそうです。先にその概要をざっと説明しておきますと、コミュニティデザインとは…「人をつないでコミュニティを作り出すための方法を策定（デザイン）し、新たなコミュニティを生み出したり、もとからあるコミュニティを活性化する。そしてそのことによって、地域の施設や場所に存在する社会的な問題を解決する」（『山崎亮とゆくコミュニティデザインの現場』より引用）ということだそうです。今回は、このコミュニティデザインとは何かを体感することが目的といえる研修でした。

島ヶ原は平成16年に伊賀市に合併するまでは島ヶ原村といって、人口2,500人の村でした。世帯数は750戸。単線のJR関西線、島ヶ原駅を降りるとのんびりした雰囲気が漂ういわゆる田舎の村です。さて、ここで一体どんなコミュニティデザインがなされているのでしょうか？　穂積製材所プロジェクトのHPから引用しますと…【穂積製材所プロジェクト：株式会社studio-Lと島ヶ原木材工業有限会社（穂積製材所）が協同運営する非営利プロジェクト。民有地である製材所の敷地を公共的な空間として展開し、都市農村交流を通じて林業疲弊によって荒廃する人工林や、過疎化が進む地域活性化などの社会的課題に取り組んでいます。】とされています。

代表の穂積亨さんのお話によると後継者の問題などもあり、製材所を閉めようとしていたようです。そこに山崎亮氏との出会いがあったとのことでした。studio-Lのスタッフのプレゼンも聞かせていただいて、施設の見学へと移りました。

まずは、studio-L伊賀事務所です（写真１）。元倉庫を改修したもので、製材所にある木材だけを使ってつくったそうですが、手づくり感あふれるとても心地よい空間でした。2012年に完成し、グッドデザイン賞も受賞しています。

次は、ものづくり工房（写真２）。こちらも個性的な改修がなされています。もとは倉庫だったのだと思われますが、床も含め、何ともユニーク。木工の機械が据え付けられ、穂積製材所の木材を使って誰でも家具づくりができる、そんな場所として今春完成したそうです。この改修には、全国から多くの人たちが駆け付けたそうです。今後魅力的なイベントも企画されており、この村とまちがつながるきっかけが上手に仕組まれているようです。

そして別棟の倉庫内につくられた木製テント、6棟です（写真３）。宿泊して落ち着いて木工が楽しめます。この施設は6組の関西の建築家有志がそれぞれ思い思いにつくりました。童心に返れるような何とも楽しい空間です。

ホヅプロを見学して感じたことは、今あるものを上手に使いながら、島ヶ原の「人」と「人」、「島ヶ原の人」と「まち（都会）の人」を結びつけるそんなイメージです。マニュアル化された従来型のコンサルティングとは全く違った匂いを感じました。また、インターンの方たちがイキイキと説明してくれる姿がとても印象的でした。ホヅプロの活動を地域の方に伝えるための手づくりのかわらばん「がはらばん」も一軒一軒、手渡しで配るそうです。そこにコミュニケーションの基本があるのかもしれません。都会の若い人たちが集まってくる魅力が、ここにはあるのだと思います。実際に関東から若者が穂積製材所に就職したそうです。きっと穂積製材所ならではの新たな魅力を見つけてくれることでしょう。

見学の後は、伊賀上野のまちなかに移動し、和風イタリアンに舌鼓を打ちながら懇親を深めました。生ビールが美味しかったのは言うまでもありません。

写真１　倉庫を改修した studio-L 伊賀事務所

写真２　今春完成した、ものづくり工房

中西修一｜
shu建築設計事務所

第30回 JIA東海支部設計競技

10月5日（土）公開審査

「きのこのような家」（シリーズテーマ「風土」を見る）

●公開審査　10月5日（土）10：00～18：00（19：00～懇親会）
名古屋市立大学芸術工学部（名古屋市千種区北千種2-1-10）

●表彰式・作品展示・講評会・記念講演会
日　　時：12月7日（土）
会　　場：名古屋大学（予定）　講演会定員：300名（先着順）
講演会講師：前田圭介氏（UID一級建築士事務所）

●審査委員（順不同・敬称略）◎ゲスト審査員 ○審査委員長
◎前田圭介（UID一級建築士事務所）、○向口武志（名古屋市立大学）、謡口志保（ウタグチシホ建築アトリエ）、道家洋（道家洋建築設計事務所）、南川祐輝（南川祐輝建築事務所）、村林桂（村林桂建築設計事務所）、村松篤（村松篤設計事務所）

●問合せ　JIA東海支部（TEL：052-263-4636）

第1回 JIA東海住宅建築賞2013

11月30日（土）表彰式

JIA東海支部

愛知県・岐阜県・三重県・静岡県の東海4県で最近3年以内につくられた住宅（専用住宅・集合住宅など）を対象に、各自が定めたテーマに対して特に秀でた住宅の施主、設計者、施工者に贈る新設の賞。6月、第1次公開審査、8月、現地審査（第2次審査）が行われた（結果はP12-15に掲載）。

●日　時　11月30日（土）
表彰式／15：00～17：00　懇親会／18：00～20：00

●会　場　名古屋大学ES総合館ホール

●審査員　横河健（日本大学教授・横河設計工房主宰）、伊藤恭行（名古屋市立大学教授・CAn（C+A名古屋））、藤原徹平（横浜国立大学大学院准教授・フジワラボ主宰）

●問合せ　JIA東海支部事務局（TEL：052-263-4636）

プロフェッショナルセミナー愛知 2013

「設備」　シーズン1

ー建築家実務講座ー ※CPD各回2単位（予定）

●場　所　総合資格学院名古屋校　講義室（名古屋市中区錦1-2-22　TEL 052-202-1751）

●講　師　一般社団法人愛知県設備設計監理協会（AEA）正会員

●参加費　（各回受講）会員、一般　1,000円　学生　無料
（全回受講）会員、一般　3,000円　学生　無料
テキスト「設備入門」：1,500円（事前申込み）
※全回受講で一括支払いの方（学生除く）にはテキストは無料。

●定　員　80名

●問合せ・申込み　JIA東海支部事務局（TEL 052-263-4636）

<第1回> 10／3（木）「総合的なデザインにとっての電気設備計画・設計概論」　村上正継（㈱MURA設備設計事務所）・佐橋政人（㈱明和技術管理事務所）　**<第2回>** 10／17（木）「総合的なデザインにとっての給排水設備計画・設計概論」近藤幸成（（企）建築環境システム）・岡田圭二（㈱環境設備計画）　**<第3回>** 11／7（木）「総合的なデザインにとっての空調換気設備計画・設計概論」植田亮（㈱ミューパートナーズ）・伊藤弘正（㈱建築設備計画）
※時間はいずれも18：30～20：30

募集

ゴールデンキューブ賞2103／2014

最優秀作品は国際審査へ

JIAゴールデンキューブ賞は、就学前から18歳までの子どもを対象とした、建築やまちづくりの教育活動、ならびに教材を広く公募し、優れた活動や教材を表彰する。

●募集内容（過去3年以内に実施のプロジェクト）　子ども向けの建築や人工環境の教育活動（ワークショップ、講習会、イベント）、あるいは成果物（出版物、道具、ゲーム、コンピュータ・ソフト等）を対象とした、4部門（学校部門、組織部門（博物館、財団、メッセナ、NPOなど）、出版物部門、視聴覚作品部門）とする。

●応募資格　上記の活動を日本で実践する個人、グループ、団体

●募集期間　11月1日（金）～29日（金）17時必着。送付のみ受付。

●提出物　応募申込用紙、A2判作品概要（所定の応募用テンプレートは、ホームページよりダウンロード）、データをCDまたはDVDに焼いたもの、実物見本（ある場合）

●提出先　JIA東海支部 JIAゴールデンキューブ賞係

●国内審査員　審査委員長／芦原太郎（芦原太郎建築事務所代表）　審査委員／稲葉武司（建築と子どもたちネットワーク代表）、大村惠（愛知教育大学教授）、手塚由比（手塚建築研究所）、藤井尚子（名古屋市立大学大学院芸術工学研究科准教授）

●賞・表彰　部門ごとに最優秀賞1点、特別賞。最優秀作品（4作品）は国際審査（UIA Golden Cubes Awards）の日本代表作品として出品する。

●詳細・問合せ　ホームページ http://www.jiagoldencubes.com

●審査　2014年1月25日（土）に名古屋にて予定。

名古屋工業大学OB絵画展

「第21回ごきそ会展」2013

名古屋・電気文化会館で開催

今年も下記のとおり「第21回ごきそ会展」を開催します。出作品点数は約80点。大作も数多く、画材は油彩、水彩、日本画など多岐にわたります。JIA会員も多数出展。ご来場を期待しております。

（福田一豊／愛知地域会）

●会期　10月29日（火）～11月3日（日）
10：00～18：00（最終日は16：00まで）

●会場　「電気文化会館5階　東ギャラリー」
（地下鉄東山線及び鶴舞線伏見駅下車4番出口すぐ）

第１回 JIA東海住宅建築賞2013 結果発表

※6月15日に第１次公開審査、8月９～10日に現地審査が行われました。
※「ARCHITECT」7月号に第１次公開審査結果速報、8月号にパネル写真などを掲載しています。

■ 大賞

撮影：中村 絵

光の郭

川本 敦史・川本 まゆみ
（JIA静岡会員）
エムエースタイル建築計画

■ 優秀賞

撮影：ナカサ＆パートナーズ

母の家

貞村 道俊＋吉元 学＋平野 恵津泰
（JIA愛知会員）（JIA愛知会員）
ワーク○キューブ

■ 奨励賞

坂の上の家

鈴木 貴紀

■ 奨励賞

撮影：矢野紀行

OSHIKAMO

佐々木 勝敏（JIA 愛知会員）

佐々木勝敏建築設計事務所

■ 奨励賞

MOGURA

宇佐見 寛（JIA 愛知会員）

アトリエ ルクス一級建築士事務所

■ 奨励賞

撮影：松原誠

ナオ・ハウス

渡辺　隆（JIA 静岡会員）

渡辺隆建築設計事務所

■ 奨励賞

まちに森を作る家

栗原 健太郎＋岩月 美穂
（JIA 愛知会員）

studio velocity一級建築士事務所

審査員長
横河　健
日本大学理工学部教授
横河設計工房主宰
JIA会員

「建築は本当に楽しい!」…今回審査を終えた帰りの新幹線で感じた正直な感想だ。

しかし、一般論で言えば建築のこういった審査は難しい。「住宅」という切り口だけで土地（敷地）も予算も住人も、条件はひとつとして同じものはないのだから、比較評価すること自体無理な話である。また、住宅は特別か?同じ建築の中でなぜ住宅だけを別途評価する必要があるのか?という議論がある。私の持論では、もちろん何も区別する必要はなく、住宅も「建築」として評価すれば良い、と思っている。ただし建築の評価はその中身との連動があって初めて建築となる…ということが、私にとっては建築を評価する上で大変重要なポイントである。特に住宅についてはその住人の暮らし、生活態度、ライフスタイル…、その建築内の空間で起こる出来事と建築の形態、空間は連動して初めてその建築が生きてくる。住宅の場合その連動の値が顕著である、と言えるのではないだろうか? そのことだけが他の建築（つまり使用者を特定できない建築）との違いと言える。

さて、実際の審査過程をたどる。

「坂の上の家」は、8月初旬にもかかわらず建築内は快適な温度を維持していた。構造躯体を利用したクールピットのおかげなのかどうか、その他の換気システムや製作もののサッシュなどの設計密度の高さは評価されるべきだ。しかしながら、家庭用壁掛け空調機を無造作に設えるなどアンバランスな点があることと、プランニングとして独身男性一人の生活形態が続くことを良しとするかどうかは気になるところ。それを余計なお世話とするほどの建築原理（ファンズワース邸のような）が示されているわけではない。…75点。

斜めに傾斜した壁にロンシャン風な開口部が付く「MOGURA」。付加的な鉄板の玄関から入ると再び半屋外のアプローチで、この二重外壁と建築下部・擁壁の緑化を散水することが熱負荷軽減に役立っているようだ。ここは評価したいが、公園に面している側のエレベーションと平面計画を連動させたプランニングに少し工夫が欲しかった。…65点。

「OSHIKAMO」。言い方が難しいけれど、これはダメだ。ひとつに、隣接する両親の住む母屋と建築の計画的リンケージがなさ過ぎること。また、外部空間を断ち切るほどのコンセプトが生かされるプランが成立しているわけではないこと。さらに、屋根架構のジョイスト梁をあれほど現しにするなら、美しく納めたい。つまり構造とデザインがリンクしていない。…58点。

「母の家」は、まず印象が「かわいらしいスケール観」だ。道路際に面しているものの、田んぼを背景として軒下のスケール観が良いし、建築内も各所に母のスケールを持って設計されていることに気付く。嬉しい。構造の単純な構成、適度な室内の距離感をつくるプランニングが良い。特に田んぼ側、風呂と洗面トイレに挟まれた風抜けの半屋外空間が主室（リビング・ダイニング）の生活環境を補強している（ただ、短手エンドのFIXガラスは×）。…85点。

「光の郭」では、一瞬、真空地帯に出たようなすっきり感を覚えた。玄関の扉を開くと、土間空間を通して、視線の抜けはその先の外部の緑にまで続いている（敷地の形状が逆旗竿になのも効果を生んでいるのだろうが、それを計画的に利用する知恵が良い）。建築躯体は約9m角、内部の高さも梁下で約5mと、このプロポーション、内部BOXを分散配置した関係のスケール感が良い。食事空間がやや寂しいと感じたが、設計の思想がディテールにまで及んでいて抜け目がない。さらに家族のライフスタイルと設計の合意点がうまく合致しているように見受けられた。…87点。

「まちに森を作る家」は建築計画上の面白いアイデアを持っているが、1階店舗はまだしも、生活を成立させるプランニングに計画との整合性が薄い。コンセプトを生かすためには、構造的にも中心部のコアの考え方が良いのだから、プランニングもこのコアを頼ることによって外周の開口部の多いR壁から縁を切るべきだった。…63点。

現地審査の様子　「坂の上の家」にて　PHOTO：HIROSHI YOKOZEKI

「ナオ・ハウス」は、計画の組み立て方に作者の優しさが見える反面、主室・急傾斜の階段など断面のつくり方に少々無理を感じた。むしろ、ひと山の敷地に連続する自邸・アトリエに設計の思い切りの良さがあって作者の力量を見た気がする。…68点。

以上、私は「光の郭」と「母の家」が際立っていたと思う。こういう建築があって良い、否、この建築があることに感謝できる、そんな建築だ。点を付けるのも、それを公表するのもいかがなものかと言われるかも知れないが、現地で拝見したときにつけた採点で、私の正直な見方である。

審査員
伊藤 恭行
名古屋市立大学芸術工学部教授
CAn（C+A名古屋）
JIA会員

さまざまに異なる現実の諸条件に対応して生み出される建築に賞を与えること、つまり本来は同列に並べて比較することが難しいものを評価する基準を自問自答しながら審査を行った。特に住宅というジャンルは発注者と建築家の関係が密であり、一義的にはそこで発見された解が幸福なものであれば、それがベストであり他者が口を差し挟むべき筋合いのものではないからだ。

まず、コンセプトが明快であることが評価基準の第一である。その建築が何を目指してい

るものなのかが一目で分かることが重要だ。どのような強いメッセージを発信できるか、コンセプトの明快さは一次審査の段階で大きな判断基準となっている。

現地審査では、それがどのような形で実現されているかを見ることになる。同時に、スケール感、光の状態や風の抜け、素材やディテールの美しさ、住居としての使い勝手などさまざまな視点が介入してくることになる。このときも、判断基準として大きな比重をしめるのは提示されたコンセプトとの距離である。例えば、空間構成のダイヤグラムと架構の形式が一致しているか否か、素材やディテールまで一貫しているか否か、空間を阻害する要素が無造作に付加されていないか、結果としてダイヤグラムが豊かな空間に結びついているか、などを見ながら現地審査を行った。

もう一つの評価基準は基本的な環境性能を満たしているかである。住居は夏涼しく冬温かいことが基本である。審査当日の2日間は終日晴天の猛暑日であり、室内環境を体感するにはうってつけであった。

「光の郭」と「母の家」は群を抜いていたように思う。個人的には「母の家」を強く推した。この家だけがクーラーがない。にもかかわらず、室内環境は最も快適だった。軒の深い大きな草屋根が直射日光を遮り、天井面からの熱輻射を抑制する。周辺が田園で、風が大きな屋根の下を抜けていく。また、この住宅は本質的な意味での開放性のあり方を問いかける建築になっている。それは、透明性=開放性ではないという主張である。前面がすべて土間になっており、複数のレイヤーからなる建具の開閉によって外部との距離を調整する。この建築的な仕掛けが、住まい手が開放性をコントロールし地域コミュニティとの関係の深さを選びとることを可能としている。

大賞の「光の郭」は極めて純度が高い建築になっている。インテリアの光の状態が圧倒的に美しい。今回の応募作の中では、最もコンセプトが明快かつシンプルであった。コンセプトを実現するために、架構のシステムから素材の選択、ディテールの納め方まで一貫しており、建築の強度を獲得しようとする設計者の強い意志を感じ取ることができる。また、それを支える実務家としての確かな腕もある。ただ、通風についてもう少し配慮がされていれば、私自身の評価は更に高いものになっていたように思う。単純なことで、トップライトの一部が開閉可能になっていれば、より快適な環境を作り出せたのではないだろうか。

個人的には、「坂の上の家」も優秀賞に加えたかった。設計者が非常に高いプロフェッショナルとしての技量を持っていることを感じさせる。特に、自然換気の機構や全面開放が可能となる大型のスティール製スライドサッシなど独自に開発されたアイデアが素晴らしく、建築の可能性を開く一つの手法を見せてくれたと思っている。

審査員
藤原 徹平
横浜国立大学大学院准教授
フジワラボ主宰

審査に先立って考えたのは、東海地域における住宅はどのような可能性を持つだろうかということだ。全国でミニ東京化が進んだ日本において、ライフスタイルも同様に均質化し、住宅建築から地域性を考えることはナンセンスに思う人もあるかもしれない。しかし私はデザイン上の表現が均質化してみえるだけで、地域性は当たり前に存在すると思う。

人口減少に加え少子高齢化が進んでいるのにもかかわらず、居住域の拡大と住宅の新築の勢いが止まらない日本では、これからはむしろ場所ごとに<散逸した個別の状況>が生まれ、そこから新しい生活像を巻き込んだユニークな発想の住宅がつくられるのではないかと考えている。

二次審査で強い印象を残したのは「母の家」と「光の郭」だった。

「母の家」は大変に素晴らしい住宅だった。一次審査で危惧していた裏側に閉鎖的ではないかという感じは多少あったが、ヒューマンスケールの親密な空間のスケールとシンプルで力強い屋根の組合せは印象的だ。造作家具や素材の選定など細部までよく練られていた。屋上緑化に散水すると、しばらくして軒先から水が垂れ落ち、家の前に小さな小川が出現するあたりなど、大変にチャーミングなランドスケープと建築との融合したデザインがあり、ユニークさと伝統的な建築の良さが同居していた。

「光の郭」は、一次審査では窓のない閉鎖性、場所と切り離されたプロダクツデザインのような抽象性への偏り、の二点が気になり私は否定的だった。しかし実際に訪れてみると敷地に対するボリュームの配置がよく練られていて、かつ二つの入口を開け放ったときの前庭と後ろ庭を貫通して出現する通り土間の説得力が、危惧を凌駕した。若い設計者とは思えぬほどに、空間スケール、構法、素材、ディテールが完璧にコントロールされている。また、非常に独創的な住宅の設計アイデアをしているのにもかかわらず、そこでの生活がきちんと地に足がついたものになっていた点に一番感心した。稀有な完成度の現代住宅であると思い、最優秀に推した。

二次審査は、小さなバスで巡っていったのだが、その道中で観る独特の状況が印象に残った。極度に低密度な住宅地、生活の隙間に入り込む混在農地、市街化調整区域がつくる豊かな自然、農家独特の分棟的な配置や家の構え、大通りから一本入ると急に入り組む複雑な土地割り、などこれらは今回審査した作品の中でもまだ十分に拾い切れていない面白い文脈ではないかと思う。

情報コミュニケーション技術の発達が働き方や住まい方を自由にしている現代は、横一線の都市化の時代から、住人が建築や環境を活用しながら独自の生活を築き上げていく時代へと変わっていくはずである。建築家としてそのような転換期において住宅建築がどのような役割を果たすのかを広く議論していく必要性をさらに感じた。今回設立されたJIA東海住宅建築賞がその議論の呼び水になっていければ素晴らしいことだと思う。

「あいちトリエンナーレ 2013」

建築関係の作品も多彩、10 月 27 日まで

牧ヒデアキ｜ makira DESIGN

リチャード・ウィルソン

名和晃平

名古屋市と岡崎市を中心に展開されている**「あいちトリエンナーレ2013」**を見学してきました。私自身が何となく感じたことをレポートさせていただきます（まことに勝手ながら人名が多くなりますので紙面の都合上、敬称を省略させていただきます）。

ブーンスィ・タントロンシン「スーパーバーバラ世界を救う」はいろいろな会場で見られる短編アニメーションです。キャラクター設定・メッセージ・表現などとても面白いと思いました。

岡崎エリアでは、康生会場の向井山朋子＋ ジャン・カルマン、志賀理江子の展示が緊張感があり楽しめました。

白川公園エリアでの青木淳・杉戸洋による名古屋市美術館の空間読み替えは、とてもチープなホームセンターで売っているような材料を使いながら巧みに空間をつくり出しており、普段の名古屋市美術館の空間を知っている者として楽しめました。

納屋橋エリアの東陽倉庫テナントビルは密度濃い内容となっています。青木野枝の作品はいくつかの場所で展示されていますが、ここの展示が最も迫力があって良いように思われました。写真と絵画を融合させて別世界をつくりあげている荒井理行、微細な音を置換・増幅し元のモノが持っている別の世界を表現している池田剛介、強烈な後味を残す片山真理、ウィットに富んだ竹田尚史、場所性を巧みに扱ったリチャード・ウィルソン、見た瞬間別世界に誘われる生成し続ける景観をつくり出している名和晃平など、見た後に考えさせられる作品が多いと思いました。

栄エリアは愛知芸術文化センターが見応えがありました。重厚な存在感と文字の内容に笑いながら考えさせられる彦坂尚嘉、作品の色合いと内容のギャップに驚く岡本信治郎、人々の頭の中の残像をそのまま展示表現したようなソ・ミンジョン、震災のモノを使いながら記憶につながるモノを新たに生み出し表現している青野文昭、都市そのものの危うさを表現しているハン・フェン、見た瞬間に思わず笑ってしまう文字とイラストのダン・ペルジョヴスキ、パラフィンワックスによる透過する空間をつくりだしている平田五郎など、途中で休憩を挟まないと集中力が持たないくらい充実しています。

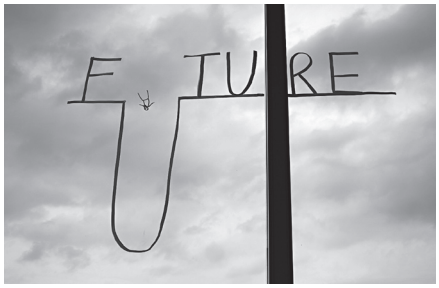
「あいちトリエンナーレ」は3年前に見たときもいろいろと面白く楽しませていただきましたが、今回もとても充実した時間を過ごさせていただきました。

建築の世界ではコンセプト・プロセス・ディテール・編集能力などが重要視されているように感じていますが、アートの世界では作品そのものが何かを的確に表現し得ているか、オリジナリティを持っているか、という部分が重要とされている気がします。もちろんそれぞれの分野の歴史的文脈の中で、その作品がどのような意味を持っているのかということも重要なことだとも思います。作家のメンタル・フィジカルを含めた全人格で作品がつくられていて、妥協というものが基本的に存在していないような気もします。概念の追従（既存のモノをトレース・編集しただけのモノ）に意味はなく、そこに新たな価値観を提示していない限りは作品として成立しないのではないかとも思ったりしています。アートの場合は一見して概念の追従のように見えるものにもパロディにすり替えられたりしながら周到に作品がつくられていて、作品そのものが訴えかけてくる力を持っていると思います。クライアントがいるいない・ 機能性・耐久性・材質・工法・法規・構造・設備・ディテール等々の問題もありますが、立体表現という側面では、アートも建築も地続きな部分があるように感じています。

建築は実現することがいろいろな意味で大変で、建築家というのは大変厳しい職業だと常々感じています。時にはアートを体験することで、他人の作品の力を借りながら、人それぞれに軽やかにメンタル・フィジカルの旅をしてみるのもよいのではないでしょうか。

ここでは取り上げていませんが、今回は建築関係のプログラム（オープンアーキテクチュアなど）も多く用意されています。これだけのアート作品が揃うことは、なかなかないことです。「あいちトリエンナーレ2013」は10月27日まで開催されていますので、会員の皆様もぜひ実際に体験されてはいかがでしょうか。

ハン・フェン



ダン・ペルジョヴスキ

青野文昭

JIA愛知「建築家フェスティバル」

「トリエンナーレ」連携事業を10月に開催!

久保田　英之｜久保田英之建築研究所

昨年の長者町ゑびす祭りの様子

2013年度のJIA愛知の一大事業として、「あいちトリエンナーレ2013」の開催に際し、連携できる事業を行おうということから、この企画がスタートしました。

鈴木利明愛知地域会長からも、結論を決めた議論ではなく、沸々と湧き上がってくる意見を大切にした企画づくりをとのことで、研修事業室を中心としたメンバーにより6月に第1回の会議を行いました。コンペや作品展のように、はっきりとした企画目的から入った会議ではなかったので、参加会員で自由で活発な議論をした結果、建築ではスタンダードなパネル展示ではなく、建築家自らが汗をかき、社会に発信していく姿勢が大切ではないかという意見が多く出されました。あいちトリエンナーレは、8月～10月までの開催。どう考えても、この期間には間に合わないと一旦は結論付けましたが、トリエンナーレの会場の一つである名古屋市中区の長者町の古い商店街や伏見地下街の魅力に皆が吸い込まれ、商店街の活性化にも一役買えないかと発想するようになりました。

それであれば、トリエンナーレの開催中でもある10月中旬に行われる、長者町ゑびす祭りに日程を合わせ、短い準備期間ではありますが、できることを模索していこうとなりました。結果的には、伏見地下街にある間口7.2m×奥行3.6mのスペースを見つけ、JIAアンテナショップとしての拠点を構えてイベントを起こしていきます。地下街の朝夕の人通りは通勤者も含め多く、毎年ゑびす祭りには大変な混雑もみせます。ゑびす祭り協議会とも連携し、駐車場を利用した広場スペースにてダンボールによる迷路づくりやワークショップなどを行い、地域の祭りに参加し、市民とふれあいながら活動していきます。

基本的な目的は、JIAという団体の存在意義を社会に向けて発信していくと共に、我々会員が地域に根ざした建築家の役割を再認識し、公益社団法人としての活動のモデルケースとなるよう努力していくことです。対象となる活動参加者は、JIA愛知の会員となります。また、この事業に際し、これからのJIAを牽引する若手の育成も願うべく活動していきますので、ご理解とご協力の程よろしくお願いいたします。

タイトル：「JIA愛知　建築家フェスティバル」
期　　間：10月12日（土）～20日（日）の9日間
場　　所：伏見地下商店街の一画
※19日と20日は、ゑびす祭り「ゑびす昭和村」の一画
内　　容：

●JIAの活動を常設展示（パンフレット・パネル・映像）
●建築関係映画祭
「摩天楼」…モデルはフランク・ロイド・ライトともいわれている。12日（土）予定
「ル・コルビジェの家」…ル・コルビジェ設計のクルチェット邸を舞台にした映画　15日（火）予定
「屋根 IL TETTO」…巨匠ヴィットリオ・デ・シーカ監督の珠玉の名作　19日（土）予定
●ダンボールによるワークショップ
災害時に役立つダンボール工作（椅子・テーブル・トイレ・ベッド）ダンボール都市を作ろう（「ゑびす昭和村」にて）
●紙コップを使った造形ワークショップ
●ECOを考える草屋根セミナー
●JIA東海住宅建築賞2013受賞者によるシンポジウム
●300人の建築家メッセージボード
●建築家によるJIAナイトトーク
●建築相談　　●JIA書籍の販売

今後の詳細打ち合わせにより一部内容の変更もあるかも知れませんが、一般市民の方々にも楽しんでいただける企画を用意していきます。当然、我々会員が生き生きとした活動をしていかなければなりませんが、事務所スタッフ、学生に至るまで建築の専門を学んでいるヒトつながりにも一役買えればと願っています。

今回の事業は、従来の展示空間を抜け出し、一般の店舗を借り、通りすがりの市民の方々に広く触れていただける形です。JIAカフェのイメージから、夜はアルコールも少々入りながらのトークへと、コト起こしから繋がるメッセージが多くの人に伝えられれば最高です。会員の皆様におかれましては、ご参加とご協力のほど、重ね重ねとなりますが、よろしくお願いいたします。また、スタッフや学生への呼びかけも大歓迎です！

伏見地下街の会場予定スペース

JIAと私 ①

かつて2004年11月号よりJIAの活動を長らく続けてこられた方々による寄稿「JIAと私」が連載されましたが、今月号より新たに随時掲載していきます。

ブリテン委員会の体制確立、これからもJIA活動に邁進

伊藤建築設計事務所　森口 雅文

もりぐち・まさふみ｜JIA愛知会員。1937年京都市生まれ。京都工芸繊維大学卒業。伊藤建築設計事務所代表取締役会長

JIAに入会したのは、1987年5月「社団法人 新日本建築家協会」の発足時に遡ります。活動に参画したのは1990年の春、当時愛知部会（現：愛知地域会）の初代ブリテン委員長で、次期愛知部会会長候補の森鉦一氏から次期ブリテン委員長の推薦を受けたときに始まります。

当時、ブリテン委員会とは名ばかり、実際、機関誌「ARCHITECT」の編集作業をするのは委員長一人で後は建築ジャーナルの編集者だけであったように記憶しています。まわりの「建築ジャーナルに任しておけば」との慰めの言葉に反発、委員長就任早々の日曜日の夕方、数人の委員（その後、歴代の委員長になられる方々やブリテンに関心のある方々）を一本釣りし、ようやくブリテン委員会としての体をなした次第です。

企画・編集と取材、原稿チェックは必ずJIAの会員が自ら実施し、建築ジャーナルは編集の専門家として支援する立場であることを契約の書面でも明確にし、発行は毎月1日と設定しました。この原則を今でも頑なに守ってくださっている歴代の委員長はじめ委員の方々のご努力にあらためて敬意を表すものです。JIAの活動をこのような形でスタートしたものですから、いかなるときにも、その渦中にありながらも、JIAの活動を常に会員の目と第三者の両方の目で確かめる慣わしとなったのは、私にとって大変幸せなスタートであったと言えましょう。

以来二十年余、東海支部幹事・愛知部会副部会長、東海支部副支部長・愛知地域会会長、理事・東海支部長、理事、東海支部愛知地域会監査、同顧問、東海支部顧問を歴任、現在は東海支部愛知地域会相談役です。本部関係では基本政策会議委員、JIA会館活用委員会委員、JIA職責委員会副委員長を歴任、現在は、JIA関連の株式会社建築家会館取締役、建築家会館持株会監事を務め、JIAの活動を側面から支援しています。

その間にいろいろな問題を取り組みました。「ARCHITECT」編集体制の確立に始まり、同誌の支部機関誌化、愛知地域会保存研究会の設立、UIA大会（93年シカゴ、96年バルセロナ、99年北京、02年ベルリン）への参加と、失敗に終わりましたが東京誘致につながったと思っている05年UIA大会の名古屋誘致、基本政策会議への参画、年会費改定、法人問題、建築家資格制度、CPD（継続職能研修）等々。どれをとっても、節目節目で出会った先輩や同輩、後輩と一緒になってその時々の大役を果たしてまいりました。

1993年UIAシカゴ大会にて

2002年UIAベルリン大会にて

その結果、「公益社団法人」「登録建築家」「CPD」とそれぞれ大きな成果を得られましたが、まだまだこれから十分なメンテナンスが必要です。「公益社団法人」に関しては定款に定める運用がどれだけきちんと実施できるのか、第三者の評価によらずとも、会員の自助努力の姿勢が望まれるところです。「登録建築家」に関してはUIA基準にのっとった第三者の認定する新しい建築設計者の資格制度が法制化され、登録建築家もそれに包含されるまでは一般に開放すべきでないと今でも考えています。なぜならば登録建築家はJIAが認定しJIAが責任を取れる範囲のものである限り、その対象は当然JIAの会員に限定されるべきです。かつてJIAで「利益の衝突」を「不毛の議論」として議論を避けたことがありました。資格が個人の所属（職域）にかかわらずに付与されることになっても、現行法規では業務を遂行するとき、その所属（職域）により依頼者との間に利益の衝突が避けられないことには変わりなく、そこに専業の建築設計者の職能団体としてのJIAの存在する意味があると考えます。したがいましてJIAの会員は全員登録建築家であるべきで、またその制度を担保するCPDも、制度発足時のように、当然JIA会員の義務と心得るべきでしょう。

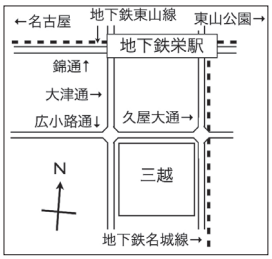
このたびの総会で名誉会員の選任の栄誉を受けました。身に余る推薦の言葉をいただきましたが、私心なく真面目に団体活動を励んだことは自負するところです。今回の栄誉は、これからも私にこれまでの姿勢を貫きJIAを支援するようにとのJIAの総意と受け止め、JIA活動に邁進する所存です。

登録有形文化財　オリエンタルビル屋上観覧車

現存する日本最古の屋上観覧車

懐かしのカンガルーも見守る

サンシャイン榮観覧車ははるか後輩



所在地：
名古屋市中区榮3-5-1
鉄骨造、
高さ12m、
脚間6.2m
製　造：
昭和鉄工（東京都北区）
昭和31（1956）年建造
登録番号：23-0233

■紹介者コメント

三越名古屋榮店の8階にある国内最古の屋上観覧車に乗った記憶をお持ちの方も多いであろう。三角錐のアーチをした鉄骨の脚間は6.2m。4人乗りケージ9機が取り付けられたホイールの直径は10m。一番高いところでも手を振る子どもの顔がはっきりと確認できる大きさで、家族の心温まる光景が繰り広げられていた。子どもたちにとって、屋上遊園地を訪れるのは大きな楽しみであった。

昭和29（1954）年にオリエンタル中村百貨店が開店した当時から宣伝部におられた森寿さんに、当時の屋上遊園やテレビ塔など発展途上の榮の様子をお聞きした。それによると、初代観覧車（旧型）が4階屋上のオリエンタルビルが経営する遊園地にあり、ビルが3階建てから7階建てまでに増設された昭和31（1956）年の12月に、屋上8階に新しく遊園地がオープンし、現存の観覧車が営業を開始したとのことである。

昭和49（1973）年に売り場拡張のための増築工事が終わり、8階に「舶来家具サロン」が登場。インテリア部門に専門のコンサルタントとして私の席が設けられたのもこの頃で、屋上に出ると、色とりどりのケージがゆっくり回る観覧車に癒されたことを懐かしく思い出す。

時代とともに少子化が進み、車社会となって家族の過ごし方は急速に変化し、屋上遊園への客足も遠のいていく。平成17（2005）年7月に観覧車の役目は終わったが、幸いにも保存されることになり、現存する屋上観覧車で最も古く、「造形の規範となっているもの」として、平成19（2007）年7月に国の登録有形文化財に登録された。

毎週日曜日と祭日の12時と3時の15分前になると、デパート店内に屋上観覧車の運転を告げるアナウンスが流れる。安全面から人は乗せられないが、オリエンタルビル株式会社屋上遊園担当の後藤勝彦さんのスイッチオンで、2周（1周3分半）機械保全のために動かされている。

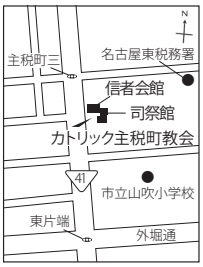
藤田淑子｜
元名古屋文化短期大学

登録有形文化財　カトリック主税町（ちからまち）教会

信者会館

司祭館

煉瓦塀とケヤキ



所 在 地：名古屋市東区主税町3-33
問 合 せ：布池文化センター
TEL 052-935-6113
交通機関：名古屋市営地下鉄桜通線「高岳」駅下車、徒歩10分・名城線「市役所」駅下車、徒歩15分　名古屋市営バス「清水口」下車、徒歩5分
開　　館：毎週日曜日（午前中）
登録番号：23-0334～0336
（2011年7月25日）

■紹介者コメント

この教会は、名古屋市町並み保存地区の白壁・主税・橦木地区にあり、今の場所に「カトリック主税町教会」が置かれたのは、明治6（1873）年に禁教令が解かれた後の、明治20（1887）年で、名古屋・岐阜地方でカトリックの伝道を始めるためにパリ外国宣教会のフランス人宣教師・テュルパン神父が来名し、現在地を医師・井上秀斎の名義で購入してその士族屋敷を仮教会に転用したのが始まりとされている。

戦災で焼失を免れたこともあり、平成4（1992）年に聖堂・司祭館が名古屋市都市景観重要建築物に指定、敷地内のケヤキは平成8（1996）年に名古屋市都市景観重要建築物等（都市景観保存樹）に指定、平成23（2011）年に信者会館、司祭館と煉瓦塀が国の登録有形文化財に登録された。

信者会館（旧司祭館）は明治23（1890）年ごろ、教会施設の建設整備期に宿泊施設として建設された。木造2階建て、寄棟造り桟瓦葺き、外壁は下見板張り。昭和55（1980）年国道41号（空港線）拡幅工事のとき西側の1梁間（2間）が除去され、寄棟造りの一部が切妻になっている。理由は不詳であるが、部分的にでも残された決断は評価したい。

煉瓦塀は信者会館建設時に建設されたようであるが、延長約30mが現存している。

司祭館は昭和5（1930）年に信者会館に隣接して外人専用の住居として建設された。設計はマックス・ヒンデル、施工は大工岩永伊勢松。木造地下1階、地上2階の寄棟造り桟瓦葺きで外壁は下見板張り、ベイウインドウが特徴。両棟とも昭和60（1985）年に瓦を葺き替えている。窓が木製から金属製に取り替えられている以外、内外の保存状態は良好である。41号沿いの信者館の外壁に残されたダミーの窓の木製両開きの鎧戸が、往時の窓周りの雰囲気を残している。

森口雅文｜
伊藤建築設計事務所

委員会再編、新会員制度について議論

本部理事　小田　義彦

今年度は理事会の回数を少なくする代わり、理事懇談会ではテーマを決めてとことん協議をしようということになり、その第1回目を7月17日13:30～16:30で開催。23名の理事（1名欠席）と1名の監事（1名欠席）と、事務局2名が参加。芦原会長挨拶でも、公益社団法人のためのさまざまな基礎的条件が整い、これからは中身を充実させていく、とのことあった。

【議題】

1）委員会再編について（松本副会長ほか）

＊既存本部委員会の再編方向性と移行進捗状況の説明

・本部建築家認定評議会と本部建築家資格制度委員会は、外部委員の参加もあり、本部で勝手に再編できないため、今年1年は現在の状態を残す。

・災害対策、環境行動ラボの委員長は、本部にこの委員会があるべきとの強い要望があり、現在も折衝中。他の委員会は、おおよそこの一覧表の通りに移行する。

＊新委員会体制については、3つのグループを副会長が管掌し、3つの委員会の委員長には理事が就任する。
A.社会貢献グループ（森暢郎副会長）には、a.職能・資格制度委員会（大澤理事）、b.公益事業委員会（赤羽理事）、c.業務改善委員会（森副会長）、B.組織管理グループ（小田義彦副会長）には、a.財務・事業委員会（小田副会長）、b.総務委員会（上浪理事）、c.広報委員会（鈴木理事）、C.会員サービスグループ（松本敏夫副会長）には、a.教育・表彰委員会（堀越理事）、b.フェローシップ委員会（道家理事）、c.国際交流委員会（岩村理事）という構成。今後はそれぞれのミッションを確認し、委員（当面できるだけ少人数でスタート）を選任し、8月22日の理事会で承認する。

＊公益事業のためのガイドライン・質疑応答集は公益事業委員会でつくる。

＊四半期ごとの事業と会計の報告は、第1回目の9月締め分で何をどういう形で支部から出してもらうのかを事務局で作っており、ひな型を各支部へ送る。

＊従来あった、災害対策・建築相談・環境・保存などは支部へ移管し、各支部間の連絡機関として連絡会議が必要か否かを今後協議する。

2）新会員制度への移行について（上浪会員会費WG座長、浅尾事務員）

＊準会員の入退会、会員サービス、行動の制約などについて、協議した。

・専門会員、シニア会員の会費（18,000円）は本部で徴収。会員証発行、会員登録、会費納入管理、機関誌・総会案内はがき送付などを含め、必要経費が約4,000円となり、残り14,000円を支部へ戻すことになりそう。再度、必要経費の算出を事務局・広報委員会にお願いする。

・準会員の行動の制約、不祥事への対応は、定款・会員規程は変更せず、入会申込書に「ご迷惑をお掛けしません。」などの文言を入れる方向で専務理事がコンサルと検討。

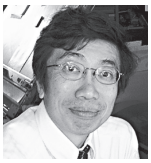
・入会審査基準、確認方法などは、原則支部と地域会で協議して決める。費用の伴うものは新会員会費から捻出することになり、現在設定の会費で良いかを確認する。ただし、会員証の交付、CPDの付与などは全国一律とすべき。建賠、グループ保険などは、なるべく門戸を開くべきである。準会員は休会はなし、資格喪失もなし。ジュニア・学生会員の補足および入退会・会費管理方法の検討は、支部・地域会でお願いする。

【所感】

新委員会体制になって東海支部からの委員の派遣は、現在のところ鳥居、小田の両理事のほかは、広報委員会の江川会員（静岡）のみである。本部委員会設置を取りやめ全国連絡会議形式となった、環境・災害対策・建築相談は、JIAにとって今後とも重要なテーマである。ぜひとも東海支部に常置委員会を設け、その代表が全国連絡会議のコアメンバーとして参画することを図るべきであろう。中でも災害対策については、今後高い確率で起こるとされる南海トラフ巨大地震により、関東甲信越・東海・近畿の3支部が機能不全となる恐れがあり、今までの本部災害対策委員会の知見を、速やかに全国10支部委員会に共有すべきと考える。

東海支部役員会報告

2013年度第3回支部役員会。本部委員会体制の改変で、今後支部・地域会に業務負担が出てくるような動きが見える。本部スリム化が目的だが、支部運営費増がないままの負担にならぬよう注意が必要と感じる。新会員制度対応は支部・地域会で検討中だが、芦原会長希望、全国で500名強準会員増はよほどの特典がないと難しいのではないか。「JIAゴールデンキューブ賞2013」実行委員会設置の議題は全国規模の新しい企画で、予算が厳しい中、東海支部としてぜひとも成功させたい事業と感じた。



見寺昭彦｜愛知地域会

日　時：2013年8月2日（木）16：00～18：00
場　所：昭和ビル5階　JIA東海支部会議室
出席者：支部長、本部理事、幹事11名、監査2名、オブザーバー5名

1.部長挨拶
2.報告事項
(1)本部報告
①第1回理事懇談会（7/17）（小田）　※理事会レポート参照
②第4回 本部広報委員会（7/16）（江川）
1.会報誌「JIAマガジン」
・ JIAマガジン8月号は新国立競技場最優秀案に対し、槇文彦氏の意見記事が出ている。
2.HPワーキンググループ
・ 各支部トップ頁の帯だけは統一したい。
・ 入会の案内情報は必ず載せてもらいたい。
3.メルマガ
・ 本部情報を早く発信するため、本部理事がメルマガのメンバーになるか、広報委員が理事会に出席することが必要。
他：東海支部HPに「ARCHITECT」を全文掲載しました。
③CPD評議会（7/24）（塚本）
プログラム申請32件、15件認定、東海支部認定3件、14件は修正。
④第126回 建築家資格制度委員会（7/29）（植野）
1.北海道大会シンポジウムについて
芦原会長「登録建築家の今後について」に関してシンポジウムを行う。
第125回 建築家資格制度委員会（7/11）
1.6月28日本部総会後の意見交換会
・ 主に芦原会長「登録建築家の今後について」の意見交換会の記事が建設通信新聞に出ている。
2.新委員会体制
・ 認定制度をサポートする実務的な「建築家資格制度委員会」「支部建築家資格制度委員会」に加えて、新たに「職能・資格制度委員会」を創設し、資格制度委員会の政策的な課題について少人数で深い議論を行う。
・ 支部で同じ名前の委員会を持つ必要があるかは支部の判断。広報委員会などは必要と思われるが、例えばブリテン委員会と同等としても構わない。職能・資格制度委員会について、本部からの支部へのミッションがないなら支部判断とする。
(2)支部報告
①会員増強委員会（8/2）（石田）
・ 静岡でつくった募集パンフレットと準会員運営細則案を基に協議した。
・ 特典・権利・義務を地域会でまとめて持ち寄り、ある程度共通にする予定。
・ 本部・支部機関誌の送付など扱いは協議。
小田本部理事補足
・ ジュニア・学生会員の入会受付審査・会費請求・入金管理は「支部（地域会）」に訂正。手続きは支部長名となるが、実務は地域会。入金口座は支部口座となる。
・ 地域会協力会員に関しては、入会受付審査・会費請求・入金管理は「地域会」。
②CPD評議会（8/2）（塚本）
第3回があり、4件の申請、1件認定、3件修正。
③第1回東海支部建築家資格制委員会（7/24）（植野）
来年3月の更新者約65名予定。9月末、特別講習会開催案。芦原会長、大友彰氏、中村勉氏の講師3人。
(3)各地域会からの報告（各地域会長）

議事
1.審議事項
①JIAゴールデンキューブ賞2013実行委員会の設置について（鈴木賢一）
・ 子どもに対する建築教育活動を表彰する制度「UIAゴールデンキューブ賞」へ、推薦する作品募集・選考するための委員会となる。
・ 公募・審査予定は、2013年8月審査規程発表、12月締切、2014年1月結果発表、4月UIAへ送付。
・ 審査委員は建築家3名と、建築家以外2名で打診中。
・ 実行委員は顧問を稲葉氏、実行委員長鈴木氏、委員14名（JIA会員10名）内諾。
・ 本部としては東海支部が設置して活動してくれれば了承するとの返事。
審議：東海支部予算はないことを前提で、実行委員会設置を承認。
②「JIA建築家大会2013 北海道」記念特集　広告協賛のお願い（日刊建設通信新聞社）（水野）
協賛しないことで承認。
2.協議事項
①準会員について（石田・服部）
4,340名の正会員に、準会員を合わせて会員数5,000名にしたい芦原会長の希望。
②「ARCHITECT」広告の件（水野）
静岡は了解。三重・岐阜も概ね了解。
3.その他
①残暑広告のお願い（水野）
②「旧規則による終身正会員資格該当者」リストアップの件（水野）

監査意見
JIAゴールデンキューブ賞の東海支部実施はがんばってください。予算は何とかなるでしょう。

2014 年度 東海支部役員選挙の告示

2013 年 10 月 1 日

東海支部選挙管理委員会
委員長　：尾関　利勝
委　員　：清　峰芳、三輪邦夫、藤井孝一、村林　桂

「東海支部役員選出規則」に基づき、2014 年度東海支部役員の選挙について次のように告示します。

記

◎ 2014 年度東海支部役員選挙で選出する役員の数
幹事　静岡地域会　2 名
　　愛知地域会　5 名
　　岐阜地域会　2 名
　　三重地域会　2 名
監査　　2 名
※なお幹事の選出は各地域会単位とし、選出方法は各地域会の定めによります。（東海支部役員選出規則第 3 条 2）
◎選挙日程

第 1 回選挙管理委員会	2013 年　9 月 17 日（火）
◇第 1 回告示（「ARCHITECT」2013 年 10 月号）	2013 年 10 月　1 日（火）
立候補・届出締切り	2013 年 11 月 21 日（木）
第 2 回選挙管理委員会	2013 年 11 月 22 日（金）
◇第 2 回告示	2013 年 11 月 29 日（金）（投票用紙とともに郵送）
投票期日	2013 年 12 月 20 日（金）
選挙結果報告　支部長あて	2013 年 12 月 24 日（火）
選挙結果の発表（「ARCHITECT」2014 年 2 月号）	

以上

（注）立候補者数が定数と同数の場合は第 2 回告示、投票を行わず日程を一部繰り上げる。

2014 年度 東海支部愛知地域会役員選挙の告示

2013 年 10 月 1 日

東海支部愛知地域会選挙管理委員会
委員長　：山上　薫
委　員　：浅井裕雄、笹野直之、澤村喜久夫、中澤賢一

「愛知地域会役員選出細則」に基づき、2014 年度愛知地域会役員の選挙について次のように告示します。

記

◎ 2014 年度東海支部愛知地域会役員選挙で選出する役員の数
地域会長・副地域会長候補　5 名
地域会監査　　2 名
※なお愛知地域会規則第 7 条 1 により、選出された地域会長・副地域会長候補は東海支部幹事を兼任します。
◎選挙日程

第 1 回選挙管理委員会	2013 年　9 月 10 日（火）
◇第 1 回告示（「ARCHITECT」2013 年 10 月号）	2013 年 10 月　1 日（火）
立候補・届出締切り	2013 年 11 月 21 日（木）（10：00 事務局受付）
第 2 回選挙管理委員会	2013 年 11 月 22 日（金）
◇第 2 回告示	2013 年 11 月 29 日（金）（投票用紙とともに郵送）
投票期日	2013 年 12 月 20 日（金）（投票用紙事務局着分有効）
選挙結果報告　地域会長あて	2013 年 12 月 24 日（火）
選挙結果の発表（「ARCHITECT」2014 年 2 月号）	

以上

（注）立候補者数が定数と同数の場合は第 2 回告示、投票を行わず日程を一部繰り上げる。

東海とっておきガイド㊾ | 愛知編 |

中渡瀬拡司（CO2WORKS）

MittE

本山（もとやま）にある料理屋さん。というと何料理なの?という問い掛けがありそうですが、何でも屋さんなのです。

僕がいるとき、別のお客さんが家族連れで来て明日の食事の予約をしていたのですが、店主が子どもに何を食べたい?と聞いて、子どもがカレーと答えると、じゃ、おいしいカレー作って待ってるね、と言ってくれるような店です。もちろんメニューはあるのですが、時間に余裕さえあれば（余裕があれば!ですよ）、そこにある食材の範囲でリクエストに応じて美味しい料理を提供してくれる。僕のように面倒くさがりはお酒だけ指定してあとはお任せと言うと、その季節や身体の調子に応じて作ってくれる。というわけで何でも屋さんです。

MittE：名古屋市千種区猫ヶ洞通3-11　メゾン猫ヶ洞１Ｆ　TEL 052-753-6477
営業は18：30～23：00　日・月休み

CO2WORKSのビル屋上

名古屋で僕が一番居心地のよい場所は自分の事務所の屋上です。

土地を決めるときに考慮した点は、敷地の隣に建物が少ないということです。そうすることで土地は狭くとも空を一人占めできるかな?と考えたからです。この作戦（？）は成功し、屋上に出るとなんとも気持ちの良い場所となりました。視界には、南側の公団の大きな木々、北側には低い建物が丘状に並ぶ風景を得ることができます。そして、風の通り抜けが抜群に良いため、いつも気持ちの良い風を感じることができます。交通量の多い道路が近くにあるので車の音は少しマイナス要因ですが、仕事に疲れて横になれば、空だけを見ることもできます。

お仕事でお疲れの方は、ぜひ癒されにお越しください。

屋上からの眺め。名古屋市名東区代万町3-10-1　日曜休み

地域会だより

＜静岡＞

8/7　建築文化研究会講演会第１回打合せに出席。
8/8　8月静岡地域会拡大役員会の開催。第１回建築ウォッチング（静岡ガス本社）。静岡ガス本社クッキングスタジオにて、簡単にできるつまみ料理教室と試食会＋ワインの夕べ。※詳細はP8掲載。
8/23　静岡県東海地震対策士業連絡会理事会へ出席。東日本大震災後の活動状況の報告をする。
9/17　9月役員会。第2回JIA塾
（1. 建築空間におけるタイルの魅力―KYタイル㈱、2. アルミサッシの省エネ・環境対策と市場動向―YKK AP㈱）
10/8　10月役員会

＜愛知＞

8/9　役員会(直前に幹部会)
8/12　「あいちトリエンナーレ2013」関連企画ミーティング４
（→オールJIA愛知体制へ）
8/26　次期役員改選（選挙管理委員会立上げ）準備ミーティング
8/29　「あいちトリエンナーレ2013」関連企画ミーティング５
（オールJIA愛知）
9/2～6　役員改選 選挙管理委員(長)選出　メール審議
9/3　2014年度版・愛知地域会　会員名簿編集方針確認ミーティング
9/9　JIA東海支部及び愛知地域会　次期事務局員選考ミーティング
9/10　愛知地域会次期役員改選 第１回選挙管理委員会
建築八団体(次年)新年互礼会(JIA愛知が幹事)準備ミーティング
9/11　「あいちトリエンナーレ2013」関連企画ミーティング６
（オールJIA愛知）
9/12～13　素材を訪ねる旅⑦「鋳物」－黒部・高岡（事業委員会）
9/20　JIA東海支部及び愛知地域会　次期事務局員選考面接
役員会(直前に幹部会)
9/21　「あいちトリエンナーレ2013」見学ツアー
（関東甲信越支部／デザイン部会）
10/10～22　「JIA愛知 建築家フェスティバル」（伏見地下街／長者町会場）
（8/10～10/27「あいちトリエンナーレ2013」（10/19・20 長者町会場「ゑびす祭り」））

＜岐阜＞

7/13　JIA建築塾　13:00～15:30
場所：岐阜女子短期大学4階講義室　講師：宇野享（すすむ）氏
題目：思考の継続と深度　※詳細はP9掲載。

＜三重＞

8/9　建築士事務所協会 全国大会 三重大会への参画
『三重の建築散歩』ブース販売
9/20　第4回役員会、第4回例会
10/11　第5回役員会、第5回例会、会員研修会

古くから受け継いできた葬送という文化
弔う事を今も大切に伝えます
信頼と真心の葬儀で130余年
一柳葬具總本店

一柳の「家族葬」

安心して任せられるのは一柳です

一柳の家族葬は 654,795円～
（日本建築家協会東海支部会員様会員割引価格）
紋朱子前机祭壇〈柳1号〉（枕花1対）葬儀費用 726,930円の場合

祭壇から葬儀後に必要な後飾りまでの一切を含んだ総額の表示をしております。

1. 表示金額は税込みです。一柳の斎場にて執り行う場合の金額となります。
2. 上記費用には、祭壇、棺、焼香用具、受付用品、葬儀飾り付けに必要なもの、ドライアイス1回、枕飾り用具、後飾り用具、後飾り生花1対、火葬料金と休憩所料金、寝台車料金（市内1回）、霊柩車料金、式場使用料（いちやなぎ斎場）が含まれております。
3. 2については標準的な数量・品質で用意していますが、食事、粗供養品など、数量・品質のご希望により変わるもの、また湯かんなどご利用いただくものは別途料金となります。
4. 宗教者へのお礼は別途になります。

◎ 宗教・宗派にかなった祭壇（価格）を200余種ご用意しております。

日本建築家協会東海支部会員様とご家族の皆様には、葬儀基本価格の15%を割引いたします

いちやなぎ中央斎場
名古屋市千種区千種二丁目19番1号
TEL（052）745－1212
地下鉄桜通線「吹上駅」⑥番出口より西へ700m
駐車場／170台以上

いちやなぎ野並斎場
名古屋市天白区野並三丁目538番1号
TEL（052）899－0111
地下鉄桜通線「鳴子北駅」②番出口より西へすぐ
駐車場／100台以上

創業130余年の伝統と実績
株式会社 一柳葬具總本店
ISO 9001 品質マネジメントシステムの国際規格 JQA-QM4191
葬儀のお申し込み、お問い合わせ、事前相談は
TEL.052-251-9296 365日 24時間 受付
http://www.ichiyanagi-sougu.co.jp 一柳葬具總本店 検索

編集後記

●宿谷昌則さんの連載「自然・人間・建築と環境」第2回目が掲載されています。最近、環境の変化を感じるところです。

台風18号で初の「大雨特別警報」が出され、京都府などで被害が出ています。桂川の堤防をのりこえる水。河川の流下能力を上回る雨による被害。過去のデータに基づく治水で、長きにわたり問題がなかったようです。

名古屋でも、先だって中区で100㎜／hの雨。東海地方の多くの交通機関が運転を見合わせ、地下街も一部浸水しました。しかし地下鉄は通常運転。すごいですね、名古屋市交通局。平成12年9月にも、2日間で567㎜の雨が降っている。東海豪雨です。これも異常気象。異常気象が繰り返すとそれは、異常から平年並みになるのですよね。それに対応した都市計画や建物を設計することになりますね。台風も巨大化しているように感じます。竜巻も国内で発生し被害が出ています。

地震対策が注目される昨今ですが、他の自然環境変化も見据えた建築物をつくっていくことに注視していきたいですね。

（市川　司）

●連載「インドの都市から考える」をご執筆いただいた柳沢究さんは9月中旬現在インドにいらっしゃいます。校正は、まさにヴァーラーナシーで「融合寺院」の調査中にしていただきました。人と牛と河と都市と住まいと宗教と…魅力的なカオスの今を伝える連載は、今月号で最終回となりました。次回偶数月12月号からは、名古屋芸術大学教授の山田純さんによる連載が始まります。オペラやミュージカルなどを対象とした舞台芸術論や音楽評論がご専門です。お楽しみに。

今月号には、第1回JIA東海住宅建築賞2013の結果発表が掲載されています。6月の公開審査、8月の猛暑の中での2日間にわたる現地審査の結果です。関係者の皆さま、大変お疲れさまでした。2回3回と続き、この東海地方の風土にかなった住宅の質が向上することとともに、JIA会員はもちろん建築家の方々の交流がさかんになることを期待したいと思います。

（酒井直子）

ARCHITECT
第301号
発行日　2013.10.1（毎月1回発行）
定価　380円
発行責任者　鳥居久保
編集責任者　吉元　学
編集　東海支部会報委員会
愛知地域会ブリテン委員会
建築ジャーナル内
ARCHITECT編集部
名古屋市東区泉1-13-35
CSC HISAYA BLD.
TEL（052）971-7479　FAX 951-3130
発行所　（公社）日本建築家協会東海支部
名古屋市中区栄4-3-26　昭和ビル
TEL（052）263-4636　FAX 251-8495
E-Mail：shibu@jia-tokai.org
http://www.jia-tokai.org/